

プレゼンテーションVI「典礼暦年におけるマリアの記念」

白浜 満

1. マリアの記念の位置づけ

- ①「キリストの神秘を一年の周期をもって祝う際、教会は、幸いな神の母マリアをも特別の愛をもって敬い、また、信者の信心のために、殉教者やその他の聖人を追憶する」（『典礼暦年と典礼暦に関する一般原則』8）。
- ②三位一体への礼拝とは本質的に異なるが、そのために大いに役立つ（『教会憲章』66）。
- ③マリアの崇敬の基礎

「神の恩恵によって、キリストの諸秘義に参加した母、神の最も聖なる母として、子に次いですべての天使と人間のうえに高められたマリアが、特別な崇敬をもって教会からたたえられるのは当然である。確かに聖なる処女は最古の時代から『神の母』という称号のもとに敬われ、信者はあらゆる危険と必要に際して、その保護を祈り求めつつ、そのもとに逃避するのである。とくにエフェソ公会議のときから、マリアに対する神の民の崇敬はすばらしい発展を遂げ、尊敬と愛、祈りと模範となって表れるようになった」（『教会憲章』66）。

- ・マリアの生涯に示された神の恵みをたたえる → 『教会憲章』55～59
- ・マリアの取り次ぎを願う → 『教会憲章』60～62
- ・マリアの模範に倣う → 『教会憲章』63～65

2. マリアの祝祭日

マリアへの崇敬は1～3世紀頃まではほとんどなされていなかったが、東方教会の影響から4世紀以降から次第に始まり、エフェソ公会議によってマリアが「神の母」（テオトコス）という称号のもとに崇敬されることの正統性が認められてから盛んになった。

- ①祭日 ー神の母聖マリア（1/1）→ 431年 エフェソ公会議による「神の母」宣言
無原罪の聖母（12/8）→ 1854年 聖母の無原罪の御宿りの教義決定
聖母の被昇天（8/15）→ 1950年 聖母の被昇天の教義宣言
- ②祝日 ー聖母の訪問（5/31）、聖マリアの誕生（9/8）
- ③記念日 ー聖母のみ心（聖霊降臨後第二主日後の土曜日）、天の元后聖マリア（8/22）、
悲しみの聖母（9/15）、ロザリオの聖母（10/7）、聖マリアの奉献（11/21）
- ④任意 ールルドの聖母（2/11）、ファティマの聖母（5/13）、カルメル山の聖母（7/16）
マリアのみ名（9/12）、年間週日の土曜日・聖母マリアの信心ミサ

3. マリアへの信心

- ①5月 聖母月：教皇ピオ7世はフランス皇帝ナポレオン1世により幽閉の身となったが、1814年ナポレオン失脚後、ローマに帰還。聖母のご加護に感謝するため、5月24日「キリスト信者の扶助者・聖マリア」の祝日を制定したことに由来。
- ②10月 ロザリオの月：レパントでの戦いの勝利（1571年10月7日）を祝って、教皇ピオ5世が、1573年の同日を「ロザリオの聖母」の祝日を制定したことに由来。

4. 司牧的配慮

- ①典礼暦年の中心的テーマであるキリストの諸神秘を1年周期で祝う中で、そのよき協力者であった聖母の祝祭日を関連づけて説明し、キリストへの信仰へと導く。
- ②典礼（とくに主日のミサ）と、聖母信心業の調和：「聖母を通してキリストへ」